ベートーヴェンへの旅 vol.1

ボッセさんと岡山さんの薫陶の賜物が、神戸のベートーヴェン・チクルスには宿っている。

神戸大学大学院教授 / 音楽評論家 藤野 一夫

異彩を放つ入魂のチクルス

いよいよ神戸市室内管弦楽団による「ベートーヴェン・チクルス」が始まります。このまたとない機会に、ベートーヴェンとその時代のことを、より深く知っていただきたい。現代に生きる音楽の力を、より豊かに感じてほしい。そのような思いから「ベートーヴェンへの旅」と題したエッセイ・シリーズを、オススメCDやDVDのご紹介とともにお届けいたします。

「チクルス」とは「シリーズ」に近い意味のドイツ語で、特定の作曲家の作品を連続で上演する音楽会、いやそれ以上の意味があります。多数の作品をどのように意味深く組み合わせ、聴衆に新たな気づきや驚きをもたらすか。単なるシリーズとは異なる企画者の腕のみせどころです。

ベートーヴェン生誕250年にあたる2020年、世界中でチクルスが企画されていますが、神戸のチクルスは世界を見わたしても、ひときわ異彩を放っています。楽聖の全交響曲9作品と全協奏曲7作品から毎回、深慮にもとづくプログラムを構成。また前夜祭として、神戸市混声合唱団との共演で超大作『ミサ・ソレムニス』(『荘厳ミサ曲』)が披露されます。神戸市混声は、神戸市室内管と同様、日本を代表する実力派プロ集団。神戸が自信をもって世界へ創造・発信できる、じつに中身の濃い、本格的で壮大なチクルスなのです。

企画者は故・岡山潔さん。ベートーヴェンの生地ボンのオーケストラで第一コンサートマスターとして長く活躍され、帰国後は読売日本交響楽団の第一コンサートマスターを歴任。また東京藝術大学教授として数多くの俊英を育てられた。1994年から神戸市室内合奏団を指導され、2012年に90歳で逝去されたゲルハルト・ボッセさんのあと、音楽監督を引き継がれました。

ボッセさんは、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の第一コンサートマスターとして、ドイツ音楽の精髄を世界に広めた名匠。幸いボッセさんが指揮するベートーヴェンの全交響曲はDVDで堪能することができます。2002年夏、新日本フィルハーモニー交響楽団とおこなった「ベートーヴェン・チクルス」のハイビジョン収録。わたしの宝物です。ボッセさんのベートーヴェン解釈は、質実剛健ながら斬新でしなやか。躍動感にみちた造形美の世界！フレーズの隅々まで生命のリズムが脈打ち、澄みきったハーモニーの推移が音楽の表情を刻々と変えてゆく。一瞬たりとも無意味な音はありません。

ボッセさんと同じく、世界的オーケストラのコンサートマスター、そして弦楽四重奏団のリーダーとしてベートーヴェンの音楽を熟知していた岡山さん。いかに神戸市室内管が、国際的にみても理想的な指導者に恵まれ、ベートーヴェン・チクルスに向けて、技術面、精神面ともに大切に育まれてきたことか。

岡山さんは、音楽人生の総決算として、本チクルスの実現に命を賭けておられました。しかし、昨年の10月1日、チクルスの本番を監督することなく天に召されました。ボッセさんと岡山さんの薫陶の賜物が、神戸のベートーヴェン・チクルスには宿っているのです。異彩を放つ入魂のチクルスに胸が高鳴ります。

ゲルハルト・ボッセ

岡山 潔

著者私物(撮影著者)

『ベートーヴェン：交響曲全集』
ゲルハルト・ボッセ(指揮)
新日本フィルハーモニー交響楽団
2002年収録
Octavia Exton

『ミサ・ソレムニス』復活の軌跡

11月16日(土)に、神戸文化ホール大ホールで開催される前夜祭のプログラムに注目しましょう。1770年にドイツのボンで生まれたベートーヴェンがウィーンに出るのは1792年。ハイドンがロンドンからの帰路、ボンに立ち寄り、ベートーヴェンを弟子に取ったのです。その直後に書かれたピアノ協奏曲第2番は、第1番よりも先に作曲され、モーツァルト以上にハイドンの影響を強く受けた逸品。1795年、ウィーンのブルク劇場での初演は大成功を収め、ベートーヴェンはピアニストとしても颯爽とデビューします。

このころのベートーヴェンは、まだ難聴の兆しもなく、前途洋々。曲の冒頭から活気が喜ばしくはじけ、青春の息吹が全曲にみなぎっています。チクルスの幕開けにふさわしい生命の賛歌です。わたしに協奏曲第2番の真価を教えてくれたのはアルゲリッチ。ロンドン・シンフォニエッタを弾き振りしたCDは、ハイドン最後のピアノ協奏曲ニ長調をカップリングした超名盤。アルゲリッチの天才の閃きを通して、ハイドンとベートーヴェンという師弟の深い縁をも再発見できます。

著者私物(撮影著者)

『ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第2番 変ロ長調 Op.19他』
マルタ・アルゲリッチ(指揮・ピアノ)
ロンドン・シンフォニエッタ
1980年ステレオ録音
ソニーミュージック

前夜祭のプログラムの後半は90分に及ぶ記念碑的大作『ミサ・ソレムニス』。中断をはさみ足かけ4年、1823年に完成されました。協奏曲第2番との間には30年近い隔たりがあります。その間に、ベートーヴェンは激動の時代を生き、外的にも内面的にも大きな変化がありました。前夜祭のプログラムは、この両作品を通して、その音楽的発展と、絶望からの復活の軌跡をたどる旅といえそうです。

それだけではありません。チクルス全体に目を向けたとき『ミサ・ソレムニス』は、これと雁行して作曲された第九交響曲とともに双子の巨人。今回のチクルスは宗教曲の最高峰で始まり、交響曲の総決算で閉じられる。その深い意味のヒントはワーグナーの明察にあります。『ミサ・ソレムニス』は「正真正銘ベートーヴェンの精神にみちあふれた純然たる交響作品である」と。

もとより『ミサ・ソレムニス』は、カトリックのミサで用いられるラテン語の通常文に作曲されています。友人にしてパトロンであったルードルフ大公の祝賀儀式のために着手されましたが、各曲が複雑に肥大化して儀式には間に合わなくなってしまった。ついに『ミサ・ソレムニス』は、教会での儀式のための音楽という役割を超えた、それ自体で自律した宗教的芸術作品に発展したのです。じつは、創作に取りかかる前のベートーヴェンは、人生のどん底にありました。保守反動のウィーン体制期、オーストリア宰相メッテルニヒの圧政のもとで言論と表現の自由が弾圧される。またウィーンの聴衆の趣味の軽薄化によって、くそまじめなベートーヴェンの音楽は見向きもされなくなっていました。生活苦の上に、唯一の愛情を注いでいた甥カールの自殺未遂が重なります。あの不屈の意志の音楽家が「生ける屍」となっていたのです。

『ミサ・ソレムニス』には、人生最大の苦境からの復活の歌が深く刻まれています。ベートーヴェンは自らの神への信仰を、バッハの『マタイ受難曲』や『ロ短調ミサ曲』と並び立つ、宗教的芸術作品にまで高めたのです。人間の世界を超絶したところに、とてつもなく巨大な実体がそびえ立っています。わたしたちは『ミサ・ソレムニス』を仰ぎ見てめまいに襲われ、そのあとに心の奥底から喜ばしい力が突然わきあがってきます。とくに「グローリア」は圧倒的。「クレド」は魂を貫いて響きます。「サンクトウス」の「主の栄光は天地にみちて」は、第九の「歓喜の歌」をも超える晴朗な喜悦のきわみです。

わたしは中学生の頃から、クレンペラー指揮、ニュー・フィルハーモニア管の箱入りLPレコードを、すり減るほど聴きこみ、心の糧としてきました。歌手の気迫も尋常ではない。人類遺産と呼ぶべき録音です。バーンスタインの緩急が激しく、ヒューマンな演奏も感動的。最近では、古楽奏法の巨匠アーノンクールによる鮮烈な解釈に目から鱗です。ともにコンセルトヘボウ管との名演奏でDVD版が出ています。視聴しての比較も一考です。

著者私物(撮影著者)

『ベートーヴェン：ミサ・ソレムニス Op.123』
オットー・クレンペラー(指揮)
ニュー・フィルハーモニア管弦楽団
1965年ステレオ録音
ワーナーミュージックジャパン

合唱人にとって通称『ミサ・ソレ』は目指すべき難曲。わたしは大学院生のときに、ある市民合唱団を切り盛りし、不遜にも『ミサ・ソレ』に挑戦しました。意中の指揮者は「昭和のヤマカズ」こと山田一雄先生(1912-91)。直接、お願いに伺ったときのことです。先生は快くお引き受けくださり、恐る恐るギャラのことを持ち出したところ、「ボク、いらない！」と。そのときのチャーミングな仕草が忘れられません。ダンディなヤマカズ先生の『ミサ・ソレ』から、わたしたちは自由な精神の遊びと、鬼気迫る集中力の至芸を体験し、超越の瞬間を啓示されました。一生忘れることのできない楽興の時でした。演奏は東京交響楽団と二期会の名歌手たち。会場は古色蒼然たる日比谷公会堂。1988年9月8日。勤務先の大学に拾ってもらい、神戸に移住する半年前のことでした。

藤野 一夫 プロフィール

1958年、東京生まれ。神戸大学大学院国際文化学研究科教授。ベルリン自由大学国際高等研究所フェロー。文化経済学会理事、文化政策学会副会長、(公財)びわ湖ホール理事、(公財)神戸市民文化振興財団理事、日本ワーグナー協会理事他。専門はドイツ哲学・思想史、音楽文化論、文化政策学。近著に『ワーグナー　友人たちへの伝言』(法政大学出版局)、『公共文化施設の公共性』(水曜社)、『行政改革と文化創造のイニシアティヴ』(美学出版)、『地域主権の国 ドイツの文化政策』(美学出版)。日経新聞等の音楽批評を担当。